

# ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒 (CAEJ) の

## 日本語環境とモチベーション

— ビリチーバ・ミリン市での事例を中心に —

中島 透、根川幸男

### 要 旨

本稿は、中島・根川によって 2000 年～2003 年に実施された国際交流基金サンパウロ日本語センター「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒 (CAEJ) の日本語実態調査」にもとづいている。調査地の一つビリチーバ・ミリンの多くの帰国児童生徒は、帰国後 2～8 年経過しているにもかかわらず、高い日本語会話力を保持していた。それは、彼ら自身の日本語保持モチベーション（特に日本再訪の戦略）と地域の日本語環境（日本語・日本文化に対する家族・コミュニティの肯定的評価、一世の祖父母とのコミュニケーションなど）の相互作用が大きく働いていると考えられる。

キーワード：CAEJ、言語資源、日本語環境、日本語保持モチベーション

### 1. はじめに

ブラジルでは、1980 年代後半にはじまった就労目的の訪日がとどまることなく続いている。「デカセギ」と呼ばれるこの現象は、家族をも巻き込んだ国際的な移動であり、学齢期にある子弟の教育が大きな問題として浮かびあがってきた。(OI etc., 2001:pp.71-93)。

本稿は、中島・根川によって 2000 年～2003 年に実施された国際交流基金サンパウロ日本語センター「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒の日本語実態調査」にもとづいている<sup>1)</sup>。本調査は、両親の日伯間の移動にともなって、滞日経験を経て帰国した児童生徒を CAEJ<sup>2)</sup>と称し、その言語教育面からみた理想的な訪日・離日のタイミングなどの助言、出国・帰国に適した学習環境・教材開発などの提言を最終目標とし、ブラジルにおけるその実態を把握することを目的としたものである。

この調査を通じ、特に強く印象付けられたのは、調査地の一つであったサンパウロ州ビリチーバ・ミリン市（以下 B.ミリンと略す）における CAEJ たちの日本語保持の状況であった。彼らの多くは、帰国後 2～8 年経過しているにも

かわらず、高い日本語会話力を保持していた。この状況は言語資源という観点からも大変興味深く、何らかの要因があるはずである。本稿では、B.ミリンにおける CAEJ の事例を通じ、それらの要因について、1) 地域の日本語環境、2) 日本語保持モチベーションの両面から考察を加えてみたい。

## 2. 調査の概要

まず、ブラジル国内の日本語学校への電話調査によって、CAEJ の有無からおおよその地域を割り出し、教師研修や会議などの機会に当該地域の日本語教師に接触、さらに対象地域をしぼった。すなわち、対象地域を大都市、都市近郊農村、サンパウロ州やパラナ州など日系人口集中域外の地方都市の3ヶ所に分類し、地理的・予算的に継続調査が可能な、サンパウロ市、B.ミリン市、アナポリス市を選び出した。3地域についての詳述は避けるが、以下に概要を示しておく。

①地域	②地理的条件	③人口	④接触 CAEJ 数	⑤日系人概数	⑥日本語学校の有無	⑦日系コミュニティの影響
サンパウロ	大都市圏	約 1043 万	5 人	326000 人	有	やや大
B. ミリン	近郊農村	約 25000	12 人	500 家族	有	大
アナポリス	地方都市	約 35 万	9 人	200 家族	無	小

出典: IBGE (2003)、サンパウロ人文科学研究所 (2002)、Folha de Biritiba (2001/05/05) から作成

調査の手順としては、対象地域の状況をあらかじめ文献調査や電話調査である程度把握し、当地を訪問、日本語教師・CAEJ 父兄・CAEJ 自身の順で面接調査を行なった。

## 3. 先行研究

CAEJ を対象とした先行研究としては、村田を代表者とした「在日経験ブラジル人・ペルー人帰国児童生徒の適応状況－異文化間教育の視点による分析－」(2000)がある。この研究は、在日経験ブラジル人・ペルー人帰国児童生徒の「母国での学校や社会への適応状況を、主として、観察とインタビューによって明らかにすることを目的とした」(村田,2000:i)のものであり、ブラジル・ペルーの広い地域にわたる現地調査にもとづく多くの報告や有益な提言を含んでいる。例えば、江口は日本文化とブラジル文化への統合度によってブラジル帰国子女を「仮に」とした上で、1) 日本文化統合型、2) 両文化併存型、3) 両文化適応型、4) ブラジル文化統合型の4つのタイプに分類している(江口,2000:pp.62)。しかし、後に述べるように、CAEJ は年齢、滞日状況・期間などによってさまざ

まなタイプが存在し、それぞれのおかれた状況・問題点も多様である。江口自身がこれらの類型の中にも大きな幅があり、境界的なケースや時間の経過とともにこうした段階を経る場合があると指摘するように、1)～4)に分類しきれないさまざまなタイプがあろう。またその「適応」「統合」のレベルを調査者が評価するのも容易なことではない。B.ミリンの事例をみると、このように図式化・一般化することに、ふみきれない点が多々あることが明らかになった。

#### 4. B.ミリンの日本語環境とモチベーション

##### 4.1 B.ミリンの概観と日系人コミュニティ<sup>3)</sup>

B.ミリンは、サンパウロ市から69Km。市の面積は409平方Km、人口は24,567人(2001)。主たる産業はサンパウロ向けの果物・野菜・花卉などの栽培で、典型的な近郊農村地帯である。B.ミリンへの本格的な日本人の入植は、1947年からである。1950年代末に俳句会が催されるようになり、日系住民同士の交流が生まれた。

1965年には38家族で日本人会が結成され、翌年日本人会館が建立された。続いて農事研究会、青年会、敬老会などが結成され、さまざまな方面の活動が催された。日系住民数も戦後移住や国内移動を含めて漸次増加するようになり、1971年には55家族317人、1991年には約500家族を数えている。

市内の道路には日本人先駆者の名を冠したシゲル・タケベ通り、国道88号線沿いにはジャルジン・ソゴウ、シティオ・ヤマモトなどの道路標識が見え、日系住民の影響力が見て取れる。市中心部や国道沿いで商業を営む者もあるが、ほとんどの日系住民が農業に従事する。ブラジルで日本への就労が増加したのは、1980年代の後半からであるが、B.ミリンでもその傾向を一にしている。現地での調査によると、90年代の前半が特に顕著であったというが、現在でも日本への就労は少なくない。

##### 4.2 B.ミリンのCAEJの状況

調査を通じて12名のCAEJと接触した。2001年7月に第1回面接調査、2002年6月に第2回面接調査を行なった。第1回、第2回とも、中島と根川が分担してCAEJと1対1で面接を行ない、その状況をテープに録音した。使用言語は基本的に日本語であったが、対象者が質問を理解できない場合、簡単なポルトガル語(以下ポ語と略す)で質問を補足することもあった。また、この稿をまとめるため、根川が2004年7月に追跡調査を行った。

この調査では、対象が年少者ということもあり、自由会話でこちらへの警戒感を弱めてから、あらかじめ用意しておいた項目(氏名・生年月日・趣味・滞日中の生活・日本とブラジルとどちらがよいかなど)について質問した。この際、

挨拶、うなずき、ジェスチャー、視線、などの非言語面での反応、さらに「アシキ〜」（〜と思う）、「シン」（はい）、「ノン」（いいえ）、「アーエー？」（そう？）など会話におけるボ語挿入の有無も同時に観察した。

第2回目の面接調査では特に、自由会話とともに数枚の写真パネルを使って、写真の内容について質問するという方法も試みた。この写真パネルを使った面接調査では、国際交流基金編写真パネルを利用し、日本の小学校の登校場面、鉄道駅や地下鉄など、調査地にはないものを含ませ、それらに関する語彙が残っているかに留意した。

本稿では、3回の調査で得られたデータから、年齢、滞日期間の長短や渡航回数、家族構成、日本でのボ語接触の有無、帰国後の日系コミュニティへの接触の有無などの条件にもとづき、次ページのA～Gの7例を抽出した。以下、それぞれの会話力<sup>4)</sup>を中心に観察と面接調査の状況を記述し、簡単なコメントを加えてみる<sup>5)</sup>。

<B.ミリンにおけるCAEJの事例一覧>

①事例	②性別	③第1回調査時の年齢	④滞日年数	⑤滞日時の年齢	⑥日本語学習継続	⑦両親との同居	⑧祖父母との同居
A (HH)	女	14歳	4年半	4～8歳	継続中	△	×
B (KH)	女	12歳	4年	4～8歳	継続中	○	×
C (KM)	女	12歳	7年	3～10歳	継続中	△	○
D (SI)	男	12歳	4ヶ月	7～8歳	継続中	△	×
E (RE)	女	12歳	2年半	3～5歳	継続中	△	×
F (HT)	女	19歳	1年	11～12歳	中止	○	×
G (KN)	男	16歳	のべ4年	5～9、10、16歳	中止	△	×

○両方同居 △片方同居 ×両方不在

[事例A] HH (女)

1986年9月生まれ。日系二世の父親は1983年から日本で就労をくりかえしていたが、1994年に日本で死亡。HHは1990年4歳の時、母親について渡日。すぐに幼稚園へ入園し、小2までの4年半を岐阜県可児市で過ごした。母親によると、テレビが好きで、来日後1ヶ月ほどで日本語を話すようになった。通学した小学校に週1回だけボ語を話す先生が来たが、特別に補習などはなかったという。2003年には日本語能力試験2級に合格している。時々、先生のかわりに幼児部の指導を任せられている。

N (=インタビュアー、以下同じ) : いま何歳ですか？

HH : 14歳。

N : (写真パネルを見せながら) ええとねえ、ここにちょっと紙があるけれども、これ、見て、何をしていますかわかりますか？

HH: おそうじ?  
N: そうだね。掃除したことある? 学校の掃除。好き?  
HH: ちょっとだけ。  
N: (笑) そうだね。えー、これはどこだろう、場所は?  
HH: 教室。  
N: 教室。そうだね。掃除はいつする? 朝? 昼? 夜?  
HH: ここ?  
N: ううん。この、日本で。  
HH: ……知らない。  
N: 知らない。うーん。ここは、ビリチーバミリンはいつするの?  
HH: 月、水、金。  
N: 月、水、金。  
(パネルのほうきを指して) これはなんだか分かる? この名前。  
HH: ほうき…

以上のように、面接時、こちらの質問はほぼ全部理解し、ほとんど日本語で答えた。否定する時は「いいえ」や「ノン」を使わず、首を振ることが多かった。現在、州立中学に通いながら、午後は日本語学校で学習を続けている。母親や2人の妹たちとは日ポ両語で会話。近所に住む母方の祖母とは日本語で話し、時々NHKの衛星番組をいっしょに見る。現在、友人関係も日系人が多く、18歳になったら日本に就労に行きたいという希望を持っている。

<コメント> 帰国後8年を経て日本語会話力を保持しているのは、4歳から8歳という言語形成前期に日本で学校教育を受けたため、そして帰国後も学習を継続しているためと考えられる。責任感の付与という観点から、日本語を幼児部で指導している影響は大きく、再訪日を希望していることで、さらに高い日本語保持モチベーションが確認される<sup>6)</sup>。

#### [事例B] KH (女)

1988年10月生まれ。3歳で移住したという日系一世の父、日本語学校の通学経験がない二世の母と同居。父親がまず1991年に、母親は1992年、KH(当時4歳)と弟を連れて就労目的で訪日し、両親とも三重県阿山郡の自動車用バルブ製造工場で働いていた。KHは、日本の保育所、幼稚園を経て小学校1年まで通学。1996年まで約4年間滞日した。帰国後、一時日本語をまったく話さなくなったという。現在、地元の小学校に通いながら、毎日午後は日本語学校で学習を続けている。母親とは日・ポ両語を混ぜて会話、弟とはポ語で会話しているが、滞日経験の長い子どもといっしょに行動することが多いという。2000年には日本語能力試験4級に、2002年には2級に合格している。

N: ポルトガル語じゃなくて、日本語で全部ふつうに話そうと思えば、話せる？

KH: アイー、難しくなると思う。(中略)

N: おじいちゃん、おばあちゃんとは何語で話すの？

KH: 少し日本語と少しポルトガル語。

N: 家でNHK 見たりする。

KH: NHK 見ない。ブラジルのだけ。エ、キー…うちのビデオ壊れちゃった。

N: 今、日本に連れてってあげるっていったら、行く？

KH: はい。

N: 行って何をしたいの？

KH: 仕事とか、する…

以上のように、面接時、こちらの質問はほぼ理解したようだが、時々母親の手助けを必要とし、ポ語で答える場合もあった。一世の母方祖父母とは別居だが、接触は多く、最近まで日本の子供番組のビデオをよく見ていたという。

<コメント> 滞在期間が4年間と短くはないが、KHの場合、幼児期での移動であり、日本語保持の価値観は本人のなかで薄れはじめていることが観察される。面接時にも返事に少しポ語が混じるなど、会話力にやや衰退がみられた。その一方で、日本語教育を「満足に受けられなかった」という母親の教育に対する熱意があり、このことが学習継続に強く影響していると考えられる。

#### [事例 C] KM (女)

1988年2月生まれ。日本滞在は3歳から10歳までの7年間と非常に長く、千葉県内の小学校に3年まで在籍した。滞日中両親が離婚。帰国後は父親、祖父母と同居。母親は現在も日本で就労している。KMは毎週土曜日に母親との電話交信を楽しみにしているという。

N: 名前と生年月日を言ってくれるかな。

KM: KM、1989年2月4日です。

N: おじちゃん、おばあちゃん、元気にしてる？

KM: はい、元気になっています。(中略)

KM: お母さんは、今年ちょっと戻って、また(筆者注: 日本へ)行きました。

N: お母さんは日本のどこにいるの？

KM: ああ、ちゃんとはわかんない。

N: Kちゃんは日本のどこにいたんだっけ？

KM: ええと、千葉。

N: 学校の名前とか覚えている？

KM: むつみ第三小学校…

以上のように、面接時、こちらの質問はすべて理解し、敬語も交えて日本語で答えた。現在、地元の小学校に通いながら、午後は日本語学校で学習を続けている。日本語学校のH先生によると、理解のスピードが非常に早く、逆にポ語でのコミュニケーションに困難を感じているとのこと。同居の祖父母、弟妹との会話はすべて日本語で、NHKの連続ドラマが好きで毎日見ているという。2002年に日本語能力試験2級、2003年に1級に合格している。

<コメント> 滞日期間の長さから、帰国当初のリエントリーショックが想像され、両親の離婚にともなう母親不在も、再適応に負の影響を与えていると考えられる。一世の祖父母との同居、兄弟間の日本語使用など、密度の高い日本語環境の中におり、日本語保持モチベーションはかなり強いと考えられる。

#### [事例D] SI (男)

1989年1月生まれ。二世の父と一世の母はすでに数回の在日就労経験がある。最初に父のみが神奈川県で就労。この時、別れて住むつらさを経験し、2度目(1997~98年)は一家で静岡へ。SIは静岡市内の小学校3年へ編入、4年生のはじめまで通学した。滞日期間は4ヶ月ながら、渡日以前から日本語学校に通っていたこともあり、日本語にもすぐ慣れたという。

SIが通った学校には20人ぐらいの外国籍児童がおり、週一回取りだし授業があった。SIは小学校へ通う一方、週末は塾に通い、さらに通信教育でポ語の補習を続けたという。

母親によると、イジメなどの問題に直面した経験から、SIを就学前から連れて行けばよかったと語る。子弟の教育を考えると在日就労は3年で帰国すべきであると断言し、滞日の開始は12歳以下で行うべきであることを提唱した。家庭内言語は、60%のポ語、40%は日本語とのこと。

N: 名前と生年月日を言ってくれるかな。

SI: 生年月日？

N: お誕生日はいつ？

SI: あ、誕生日、1月11日。

N: 何年？

SI : (首をかしげて考える) ???

面接時、こちらの質問はある程度理解したようだが、答えずに首をかしげる、首を振るなどのジェスチャーが見られた。

<コメント> 滞日中の補習や通信教育などポ語接触が、帰国後の再適応をスムーズにし、日本語の継続学習をも容易にしたと考えられる。母親の教育に対する積極的姿勢が、日ポ両語の併学を促した例といえる。SI は日本で就労を続ける父親に会いに行く希望をもっており、こうしたことも日本語保持モチベーションとなっていると考えられる。

#### [事例 E] RE (女)

1988 年生まれ。日系二世の父は日本での就労を何度かくり返し、現在も在日就労中 (2004 年帰国、現在同居)。二世で日本語学校付属幼稚園教師の母と同居。父親は 1990 年に就労目的で渡日。RE は 2 年後 3 歳の時、母親とともに、父親の居住した岐阜県垂井町に 2 年半滞在した。帰国時 5 歳だったので、日本での就学歴はないが、日本語学校の H 先生によると、いつも日本語で質問し、会話力は非常に高いという。母親によると、家庭内言語はポ語だが、近くに住む祖父母とは日本語で話しているという。

N : 生年月日をお願いします。

RE : ええっと、あ、生年月日ね。1989 年 12 月 15 日。

N : 何年？

RE : ええ、1988 年。(中略)

N : 日本にいた時のこととか、覚えている？

RE : ちょこっとだけね。

N : どんなことを覚えているの？

RE : うん、保育園にいた時のこととか… うーん、友達とか…

N : 友達の名前とかも覚えている？

RE : うーん (笑)、私といつもいた子、うん、ブラジル人だけど、  
ナターリャっていう子。それから、まゆちゃん…

以上のように、面接時、こちらの質問はほぼすべて理解し日本語で答えた。現在、小学校に通いながら、午後は日本語学校で学習を続けている。家では、2 カ国語放送で日本のアニメを見るのが好き。日本の番組は日本語で見たほうが面白いという。2002 年には日本語能力試験 2 級に合格している。



<コメント> 就学年齢前に獲得した日本語は、一世の祖父母との頻繁な接触、日本語学校での学習継続などによって保持されていると考えられる。また日本のアニメを日本語で積極的に楽しむ姿勢は、日本語・日本文化に対する肯定的評価の表われと取ることができ、メディアを通じた日本語学習・日本語保持の可能性を示している。

#### [事例 F] HT (女)

1982年6月生まれ。日系二世の父は2度の在日就労経験があり、母も就労経験のある二世。HTは1994年11歳の時、母とともに渡日、妹弟と父親のいた浜松市で1年間小学校に通った。父親によると、来日後すぐ日本語に慣れ、在日中は親子と妹弟とも日本語で話していた。日本人の友達もたくさんでき、帰国時には帰りたくないと言って泣いたという。帰国後は日本語学校にも通わず日本人会との接触もないが、日本に行けば日本語はすぐ取り戻せると語った。

簡単な日本語の質問には聞き返ししながら答えようとしたが、途中からポ語にコードスイッチした。後半はすべてポ語で答えるようになり、日本語でのインタビューがなりたたなくなった。友達は非日系人が多く、恋人も非日系人だが、就労目的の再訪日を検討しているという。

<コメント> 滞日期間が短いにもかかわらず、言語的適応は早かったと言える。しかし、面接時に観察されたポ語へのシフトの状況をみると、その能力は容易に衰退することを示している。HTは日本を就労の対象国として考えており、日本語・日本文化に対する関心は薄いようである。面接時、その能力を故意に閉じているとおもわせるほど、著しい日本語の喪失が観察された。日本語の使用機会や保持モチベーションが低いと、会話が著しく後退する例であろう。

#### [事例 G] KN (男)

1984年12月生まれ。日系二世の父はKNが物心ついた時、すでに日本で就労していたという。1990年5歳の時、日本に戻る父親とともに訪日。この時2人の兄と姉はすでに日本にいた。9歳で帰国するまでの3年半、静岡県幼稚園・小学校に通った。帰国した時はまったくポ語がわからなかった。帰国後、小中学校に通いながら、日本語学校にも通う。97年に日本語能力試験1級に合格。95～96年、2000～2001年に再訪日している。日本語学校のH先生によると、現在日本語学習は中断しているが、日本人会の青年会活動に積極的に取り組んでいるという。

面接時、質問はすべて理解し、はっきりした敬語で答えた。現在近隣のモジ市内の私立高校に通い、非日系人の友達も多いが、日本人や日系人の方が「気

が合う」という。いまは父親以外の家族すべてが在日。本人も再訪日の希望を持っている。ポ語でも不自由しないが、住むならブラジルより日本の方がいいと語った<sup>7)</sup>。

<コメント> 16歳にして既に3回の滞日経験があり、日本語・日本社会に対して、強い肯定的態度を持っている。13歳で日本語能力試験1級に合格しており、このことが強い自信と日本語保持モチベーションとなっている。また日ポ両語の会話力が高いということで、地元日系人コミュニティからの期待がプラスに働き、KNの再適応状況には破綻が見られない。

#### 4.3 B.ミリンの日本語環境と CAEJ の日本語保持モチベーション

B.ミリンで接触した CAEJ には、一例（事例 F-HT）を除いて帰国後の著しい日本語喪失は見られず、日本語保持の傾向を有していることが観察された。考えられる要因について以下に、同地域の日本語環境と CAEJ の日本語保持モチベーションの項目に分けてまとめておきたい。

##### 1) 日本語環境

先の 4.2 でも見たように、日本語学校での学習継続者で、本人両親とも学習に肯定的であり、日系コミュニティ参加に積極的な A~E と G は概ね日本語保持、逆に F のような学習非継続者で、日系コミュニティ不参加型は日本語喪失という状況が観察された。

B.ミリンでは、日本語学校の活動を中心とする日本語・日本文化への接触が大きな意味を持っていると考えられる。同校では、2002年の時点で、H 主事以下3人の教師（いずれも二世）によって、月曜から金曜日まで3クラス毎日2時間ずつの授業が行われている。全生徒数は65名であり、7歳未満の子どもの対象に、幼稚園が付属している。ブラジルの日本語学校の71.1%は生徒数50人以下、88.7%が教師数1~5人で、学校形態としては地方の日本文化協会や日本人会付属のものが51.2%にのぼる（国際交流基金サン・パウロ日本語センター事業評価委員会,2001:pp.17）。これらの点からは、B.ミリン日本語学校の場合、生徒数においてやや大きいながら、教師数・学校形態においては、ブラジル国内での平均的な日本語学校であるといえることができる。しかし、同校の授業時間数は、各クラス週10時間、年間360時間と、ブラジルの日本語学校ではもっとも多いケースに属する。学習者の父母も、父兄会を組織し、学校運営に積極的にかかわる。年間主要行事は、書き初め、フェスタジュニーナ、運動会、学芸会、バザー、お話し大会などであり、夏休みや冬休みを利用して研修旅行<sup>8)</sup>なども実施している。つまり、日本語学校に通うことによって、学習者の日本語との接触が大幅に増え、日本語を介した社会参加の機会も増加、日本語保持の家庭環境も社会環境も同時に強化されることになるのである。

また同校では、日本の小学国語教科書が使用されており、授業終了後に生徒たちが教室を掃除する姿が見られるなど、この地域の日系コミュニティの保守性と日本語・日本文化への肯定的評価が観察される。さらに、日本語学校の父母との面接から、ほとんどの父母が子供に日本語習得の強い期待を持っていることが明らかになった。以下に、同地域の日本語環境を「日本語学校における日本語環境」と「家庭・社会における日本語環境」とに分けて示しておく。

## B. ミリンの日本語環境

日本語学校における日本語環境	家庭・社会における日本語環境
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学校諸行事：書き初め大会、フェスタジュニア、運動会、学芸会、バザー、お話し大会など</li> <li>・学校外行事への参加：サンパウロ七夕祭、よさこいソーラン、スピーチコンテストなど</li> <li>・日本語学校父兄会：一～二世を中心とする父母が日本語学校運営と活動をサポート</li> <li>・他校との交流：マツ・グロッソ・ド・スル州の日本語学校との交流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭内言語：各家庭によって異なるが、戦後移住者が多いため、日本語接触の機会が多く、祖父母・両親の世代の子どもに対する日本語習得・保持の期待も大きい</li> <li>・衛星放送（NHK）受信：ほとんどの一世をふくむ日系家庭で受信</li> <li>・在日就労：親戚・知人の誰かが常に日本へ行っているという状況</li> <li>・日本語の新聞雑誌の講読：サンパウロ新聞・ニッケイ新聞など邦字紙を市中心部の日系雑貨店で取り扱い。最盛期は60部、2004年7月現在は10部前後に減少<sup>9)</sup></li> <li>・日本語ビデオ：市の中心部の日系雑貨店で貸出し可能。（約400本）</li> <li>・日系組織での活動：日本人会（B.ミリン日本文化協会）を組織。野球、ゲートボール、サッカー、陸上競技など、スポーツもさかん</li> <li>・職場での言語使用：ポ語がふつうだが、日系人の多い職場では日ポ両語併用も</li> </ul>

## 2) CAEJの日本語保持モチベーション

B.ミリンのCAEJたちにとって、訪日は安易な選択ではなく、巧妙に選び取られた戦略と考えることができる。当然、その戦略の一環として、日本語保持のモチベーションも働いていると考えられる。

「南米等の地域における日本語継承について考えるとき、まずそれが各個人による主体的選択という点は共通に認識されるべきである」（佐々木,2003）と指摘されているが、この地域のCAEJには、この「主体的選択」が行われているようである。その選択には、日本再訪（就労、親族訪問、留学など）の希望と、周囲でその例が豊富に見られること（事例 G-KN など）が強力な要因として働

いていると考えられる<sup>10)</sup>。「日本語環境」で見た地域の日本語・日本文化に対する家族・コミュニティの肯定的評価、一世の祖父母との日本語コミュニケーションも積極的にこれを補強していると考えられる。また、組織としてではなく CAEJ 個人として、サンパウロ市などで行われる日系イベントへの参加が純粋に楽しみという評価も聞かれ、日本語保持モチベーションとして加算できる。

## 5. おわりに

すでに指摘されているように、継承語教育から外国語教育としての日本語教育への完全なシフトのみと考えられていたブラジル日本語教育も、「デカセギ」という現象によってその様相が変化してきている。この再度もたらされた日ポバイリンガル養成の可能性にわれわれはどう対処すべきであるか、その実態を把握し、何らかの対策を講じる必要がある（上甲,2000:p.58, 佐々木,2003）。

このような状況の中で、CAEJ たちの言語シフトが、日本語からポ語、あるいはその逆といった一方的な言語シフトモデルではとらえにくいことも明らかになっている。在日就労にともなう移動での CAEJ の持つさまざまな心理的・時間的負担の大きさを否定するものではない<sup>11)</sup>。しかし、現実に行われている二国間あるいは多国間の移動を考える場合、否定的にとらえられてきた CAEJ のあり方に、肯定的な面を見出すことも必要であろう。2004 年 7 月の追跡調査では、4 人中 3 人が日本での就労の希望を持っていることが明らかになった。また、現在は在日就労への希望を放棄したという別の CAEJ も、最近までその希望をもっていたことを明らかにしている。この訪日から帰国、帰国から再訪日という循環はやみそうにない。

本稿では、B.ミリンという限られた地域での事例を見たにすぎないが、そのようにいわば隠れた地域に言語資源や再適応のモデルが見出されることに、今後の日本語教育における大きな意味と可能性を感じずにはいられない。すなわち、加算的バイリンガルと多言語・多文化リテラシーの育成を視野に入れた教育活動の対象としての可能性である。そのためには、日本で進行中の在日外国人児童生徒の言語研究<sup>12)</sup>や教育現場と常に連携を保ちながら、言語資源の発掘と子どもたちへの支援の方法を模索していくことが今後ますます重要となろう。

付記 本稿は、国際交流基金サン・パウロ日本語センター「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒（CAEJ）の日本語実態調査」の成果の一部である。調査地の選定や面接調査の実施に関しては、リリー・カツコ・カウムラ州立キャンパス大学教育学部教授の助言をいただいた。また、調査に協力してくださった B.ミリン日本語学校の先生方、父兄会および日本文化協会の方々、そして直

接のインフォーマントであった CAEJ の皆さん、資料貸与に応じてくださった Folha de Britiba 編集部へ、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

#### 注

- 1) この調査については、中島（2001）において、その概要が報告されている。
- 2) *Crianças e adolescentes com experiência no Japão* の頭文字を取った。
- 3) この部分は、モジ入植五十年祭祭典編纂委員会（1971）や *Folha de Biritiba* 各号に加え、B. ミリン日本語学校父兄会の人びととの面接調査データによって記述した。
- 4) ここでいう会話力とは、1)質問を理解する能力 2)それに答える能力 3)語彙力 4)流暢さの点で評価されるコミュニケーション能力とする。
- 5) 事例 A～E については文字化したデータを一部引用したが、F と G については面接時の条件から録音ができなかったため、データを引用していない。引用したデータは、主に第 2 回目のものである。
- 6) 2004 年の調査時では、就労目的の再訪日はあきらめたと語った。理由は、家族、特に祖母と離れたくないとのこと。祖母とは日本語で会話しており、再訪日の放棄が直接日本語保持モチベーションを弱めるわけではないと思われるが、今後の変化が注目される。
- 7) 2004 年に母親との同居と就労目的で再訪日。
- 8) マット・グロッソ・ド・スル州の農場体験と地元日本語学校との交流。
- 9) インターネットの普及などの原因が考えられ、ただちに日本語環境の衰退と見ることはできない。
- 10) A～E、G が習った日本語学校の H 先生も、2004 年 7 月現在、国際交流員として長野県に在住。
- 11) CAEJ の持つさまざまな心理的負担とマイナス要因については、NAKAGAWA(2001)が詳しくまとめている。
- 12) 例えば、母語・継承語・バイリンガル教育研究会の活動が注目される。すなわち、「自然放置すれば消えてしまう継承語を人為的に育て、時代の要請するバイリンガルの人材づくりが可能かどうかは継承語教育にかかっており、この意味で継承語教育は 21 世紀の大きな課題である」（中島、佐々木、津田、向野、湯川、2003）とされる問題意識は、CEAJ に対する教育・支援の方向付けに多くの示唆を与えてくれる。

#### 参考文献

- 江原裕美（2000）「ブラジルにおける日系人児童生徒の再適応状況－学校と家庭における調査から－」村田翼夫編『在日ブラジル・ペルー人帰国児童生徒の適応状況－異文化間教育の視点による分析－』1998～1999 年文部省科学研究費補助金学術研究研究成果報告書 pp.51-65
- 国際交流基金サン・パウロ日本語センター事業評価委員会（2001）『サン・パウ

- ロ日本語センター事業評価調査報告書』国際交流基金サン・パウロ日本語センター
- 佐々木倫子 (2000) 「日系ブラジル人児童の日本語教育－ハワイの事例との対照－」国立国語研究所編『日系ブラジル人のバイリンガリズム』pp.64-89 国立国語研究所
- \_\_\_\_\_ (2003) 「3代で消えないJHLとは、日系移民の日本語継承」  
<<http://www.notredame.ac.jp/~eyukawa/heritage/>>
- サンパウロ人文科学研究所 (2002) 『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所
- 上甲アリセ (2000) 「ある日系ブラジル人二世のバイリンガリズム」国立国語研究所編『日系ブラジル人のバイリンガリズム』pp.45-63 国立国語研究所
- 中島和子・佐々木倫子・津田和男・向野也代・湯川笑子 (2003) 「もう一つの年少者日本語教育－継承語教育の課題」  
<<http://www.notredame.ac.jp/~eyukawa/heritage/>>
- 中島透 (2001) 「ブラジルにおける在日経験帰国児童生徒の日本語実態調査」*Anais do XII ENPULLCJ*, pp.199-200 Universidade Federal do Rio Grande do Sul
- 村田翼夫他 (2000) 『在日ブラジル・ペルー人帰国児童生徒の適応状況－異文化間教育の視点による分析－』1998～1999年文部省科学研究費補助金学術研究研究成果報告書
- モジ入植五十年祭祭典編集委員会 (1971) 『拓魂永遠に輝く・モジ入植五十年史』パウリスタ文化出版社
- IBGE- SP. “Demográfico Esatisticas Vitais do Estudo de São Paulo”. Ano 4 n.1 janeiro (2003) <[http://www.seade.gov.br/est\\_vitais/PDF/janeiro.pdf](http://www.seade.gov.br/est_vitais/PDF/janeiro.pdf)>
- NAKAGAWA, Kyoko. (2001) “Crianças Nikkeis em São Paulo”. *Anais do Simpósio 15 Anos do Movimento Dekasegui:Desafios e Perspectivas*, pp.78-84. Sociedade de Consultores.
- OI,Célia etc.(org.)(2001) *Anais do Simpósio 15 Anos do Movimento Dekasegui:Desafios e Perspectivas*. Sociedade de Consultores. Sociedade de Consultores.
- Folha de Biritiba (各号).
- (国際交流基金関西国際センター、ブラジリア大学)